

神奈川県共同募金会実施

第39回福祉作文コンクール

昭和52年に始まり、今年度もたくさんのお応募をいただきました。
県内小・中学校228校9、149作品の中から、函嶺白百合学園小学校6年 細田^{あや}斐葉
さんの作品が優秀賞に、同校3年 小村のぞ実さんの作品が準優秀賞に入選しました。



優秀賞

車椅子から見た風景

函嶺白百合学園小学校 6年 細田 斐^{あや}葉^は

十歳の春、私は病気で数日間ですが車椅子の生活を経験しました。その時見ていた風景は、今後の私の生き方を大きく変えるものになりました。
想像以上におどろいたのは、車椅子の移動では小さな段差でも大きな不安や恐怖になることです。

車椅子で段差を上がる時、前輪を少し持ち上げるのですが、ほんの少し上がっただけで後ろにひっくり返りそうな感覚になりました。私は段差があるたびに身体を緊張させ、いつもひじ乗せをぐっとつかんでいました。

歩いていた時は気に止めなかった小さな段差。自転車で走っていた時は震動が楽しかった小さな段差。そして車椅子では恐いと感じた小さな段差。

どれも同じ段差でしたが、私の立場が変わるだけで、感じ方に大きな差がありました。私たちの社会には、目の見えない方や身体が思うように動かしにくい方、車椅子で移動している方や高齢者など、色々な立場の方々と共に生活をしています。

車椅子から見た段差は、色々な立場の方に心を寄せて想いをめぐらせ、これからの私に何ができるのかを考えるきっかけになりました。

歩けるようになった今、小さな段差は当たり前前の風景に思えなくなりました。一方で、私が見た風景は、こうした生活のしにくさだけではありませんでした。

車椅子の私と話すとき、ほとんどの方が、しゃがんで話をしてくれました。

視線を同じ高さで話せることは、私の心を温かくしていました。相手と私の視線だけでなく、心の高さも同じになった瞬間だったと確信しています。本当の優しさの意味を学んだ経験になりました。

私が車椅子から見た風景は、少しの暮らしにくさと優しさが散りばめられていました。車椅子の生活を経験した今、心の高さを合わせることで、誰もが安心できる社会にしたいと考えています。

そのために、私にできる小さなことを始めようと思っています。それが私が受けた優しさを広げる一歩になると思うからです。

私は十歳の春に車椅子から見た風景を一生忘れません。絶対に忘れません。



準優秀賞

わたくしたちができること

函嶺白百合学園小学校 3年 小村 のぞ実

わたくしのお母さまは、やくざいしです。これからとどけるくすりを作っていました。一つのふくろの中に一回分おくすりが入っているそうです。

「いっしょに行かせて。」

とおねがいしたら、少し考えてから

「いいよ。少しお話してみたら。」

と答えてくれたのでついていくことにしました。行く中これから届ける方のお話を聞きました。事で目が見えなくなり、今は、ヘルパーさんや、デイサービスをり用しながら、一人ですんでいられるそうです。

ついでにお会いしたら、やさしい方でした。そこで、

「わたくしが、道を歩いている時に、目がふ自由な方にお会いしたら、何ができますか。」と聞いてみました。

「まずは、おてつだいしましょうか？と声をかけて、おねがいしますと言われたら、歩くお手つだいの仕方を教えてあげるよ。」

と言って教えてくださいました。目がふ自由な方は、白いつえを持っていて、そのはんたいがわの手を自分のひじにつかんでもらうそうです。そこで、わたくしは、実さいにやらせていただきました。せまい道になったら、ひじを後ろにして、一れつになるようにすることや、かいだんが終わる時は、立ち止まることなどはじめて聞くことばかりでした。

お話を聞いた後、わたくしは、えきのホームで、目をつぶったお母さまに、わたくしのひじにつかまって歩いてもらいました。よくできたと思いました。お母さまに、
「大じょうぶか心ばいだっし、こわかった。」
と言われました。よく考えたら、どちらに行くかも言わないでだまってあるいていたことに気がつきました。

目がふ自由な方にお会いした時、こまっつていられたら「お手つだいしましょうか」と声をかけて、きちんと言葉をつたえながら、お手つだいたいと思えます。